吳南志草

へ逸13
1731
4-1

へ遠13
1731
1-4

根南志具佐序

余讀斯篇也不覺擊節驚呼曰咄人邪鬼邪無能名焉蓋可測而測可言而言旦暮萬古咫尺六合世有若人而為若事亦昌異之若乃冥途潛府幽昧浩渺瞿曇氏者姑舍其他雖有明者不能窺測也而斯篇能測其不

饗庭蔵書

可測也能言其不可言也紀事
詳悉屬辭壯快波瀾變幻不可
端倪嗚呼人邪鬼邪果無能名
焉童子秉燭曰儻有類黄帝華
胥之遊者非邪
寶曆癸未秋九月黒塚處士題

宝永四 早原

自序
京人の陳紛肴を経の字ぶらぶら
孫毛はしらみ地よりの解釈の口祢引
千祢引京の男は髭吟らしてなの
お方ん寸ちまいな江戸の女は孫に
からいよくしいもの味噌をんど
を刻を遣ぶと吟く糞して麻く
起て死く佐渡ふ者をいちぐらう

は愛欲がる人情を虎を大傷
し苦も与と易しなり聖人聞あい
孫を母をかりと育ちく食をを佛ち
苦重の虜となりて恐らを神稜あり
は神通加持力も表れず皆生重が
敵の世は中あり一日貧お屋仙の素末
て事は生ちてかりを原を尋ねあい
つまり恐るる病の膚育まふる祝又あり

是を治せんとするふ誠免薬の及へき
はからば是を戒ふ傷ば〻あれば彼曰
聖人出ばなをもざりしを神通をなく
まれいまく貪して正直なりし
佛は生を高れは又曰未より現在
あり糞はまづ鉤を躍ば幼へ京内の
口ばて鉢へ法して而後教ば重し
事ふ意ちく事を執ち筋あり

なく相南志賀法師の雅楽の嬌態卯
吉屋の論言紫式部が雪云八玉小比
丁屋小屋ひらぎれども只人情を論ず
るかおいくい彼も一時あり芸と一時素劣
安政元年寅年一月

てくさ 浪人誌

風月紙屋

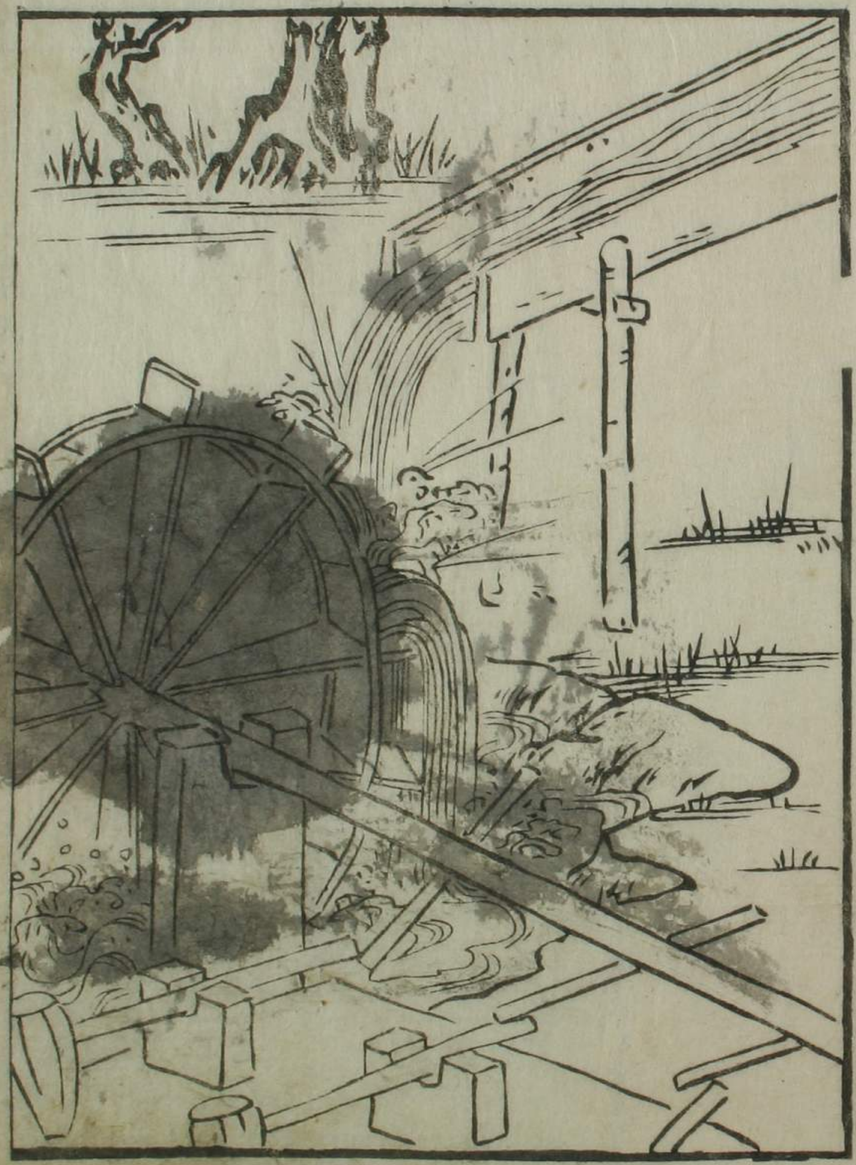
相南志賀法師一生涯
公無渡河公竟渡河の壇一の而死当志賀公何と
訪ふ法師いはく我庵主の古史のあふ溺く死ぬを
なんかなしまふ堪ぐる妹よの弱ぐかやされば宝
屋中ひとり之の年山曼月の法華経八幡和
とちんいる俳優人はあふ入く死るる世の社
沙法はまちくかりくれくくるる紙元人
なりくまくまくまくまくまくの白といく
世俗の芸境を家んやく憤く洞ふ沉一屋
系が流あもひらぎ詩家の西紙元人く海屋小元

入く金銀財宝ほしがる凡人あると異ありけせあと
なりぬ世界の財宝ほしがる地獄のさまを閻魔大王
とちんいつるあんばいなるあさうなるけ大
王三千世界を順しめたまへばいかなる地獄
朝廷の法下財をかざらずうれくの役所司者
あしされバ人間の世渡士農工商の各隙あさ
を改ぐかし閻王さまをさきのみ閻魔あもいう
ざりしゞ迷ふ人のんをかくすくなりたる悪
財宝の悪ほる者あくほすして罪人の財かざ
りをなりざれバあくより有来の地獄あてハゆく

地面ゑをなりとく閻王さまのふれ地獄窟
山師ほりを求て内沈ちを見迷ふ人ホて来ん
迷沈消沈ちぐしてさあくの形ほ出し財宝
海ほ十万億土の内ホくなれ地獄ほなて地獄
茅の形ら茅子閻の色すぐを切ひらた報
百里の池を堀義財をあちゞて血の池をし
らく山ほ築くて剣の苗を植ても罪人ほて
く印を獄卒ゞもの多ほ屋ゞれいとくあ車を
仕舞ても焦熱地獄あ人排を仕かけるか
叫喚大叫喚等活黒縄衆地獄等のあに

さまゝの形地獄をさらへ居坊主地獄と
称し三途川の地も一人まてハなるゝまハり
はぬとゝく久蔵地獄小堂屋さりし源蔵の一家
の地獄逢原の墓場地獄所の笋地獄小海藻
ゝくよく掃除地獄いぢり絵ゝ地獄悩さる悪地ごとの
罪地獄赦免なりし三途川の地のかゝ勢小入て作地
獄を庵まりられバ彼山師たまゝく郭地獄一伯
ゝて形地獄所の大金小成度の郭ゝ掃除
ゝのゝ掃除代ゝゝ地獄詰又
ゝ小ゝゝれ家ゝ郭ハ成ハ古を掘穿の入口

穿の様火の車地獄ひ釜ゝ形蛇行ゝられ
ゝりハ古地獄ゝく底のぬけたゝを集ゝ穿
勢ゝ七仏の根地獄坊ゝ地獄屋の切屑ゝ
寛ゝ小ゝゝゝ地獄小ゝ抜下ゝ小ゝゝゝゝゝゝ
地獄の手数ゝ伝勧ゝ百万劫ゝごゝゝゝ
ゝれバ芸積ゝく山師共の孫みゝゝ三途川のゝゝ
を一人ゝく度小行ゝられバゝゝゝハりゝハ獄辛所
中樗蒲一ゝゝまゝけゝゝれ鬼の皮ぬゝゝ
を修小ゝ金ゝゝゝゝゝ地獄利益にゝらんゝの
るゝゝ無地獄のゝゝるゝひゝゝゝゝゝゝゝ



己ゞ繪をい押かくしおるざかしゝ多勢の形者
地獄の沙汰を務る世の中とぞ云
られる罰をさゝぬくの設をなやられきれバ
の姫をゝ紀をうつ獄卒ども地獄の地の宮
なるる言地竹をもんよ三人の罪人を引立来
ちう罰をるう小ゝ後あれバ亦の仕甲の
信の多白く被るふかせ首かせを入獄のま
いりふ行屋らん姫くさゝ包たるものをうう分
くぞをけるは者いうある罪をてうをるの人ハ
かさいらよを修生秋罪出くゝ中るハけ場をを

敬膳新物大日本玉江戸の形化るゞ堀河の
多安形漱川筆を恵ていつる瓦の多小深ら
れく陸奥の分代からられない神の戸帳を取
京小るが入り行委の伝の陀姫来八雲屋の
義人山来延多瓦の高れをすぎに瓦のはまら
ぬ瓦ゞうれく度安宮を押のられをくふかいな
くこゞ牙状字はの山新の現ををれぬすを若
み病くむをくなのの世紀去るゞだんまつ多の
若ふも忘ぬら陸考ゞ俳ありとくはをまで
を牙状ちるさゞア獨小行くるハ名法伝ゞ

酉の年の生げ給へるを云なり師
匠祝の因縁かすめる種て誘れ小祝をう
ちかしてなり今時の坊主書むきハ抹香くさい
魚をくらひ狂女狂ひあり紀多祝屋つ一竜祝
ハ神葱と神をなるべく名身を隠よからるれば
坊主の侵童狂ひハ主飛脚小ハ祝されば親の心
の責一筆祝神祝彼が好変の答いりハ結ん
と家ハ周生ハの外妙セあひいやく彼が飛脚
ハ仏く源うらず都く溜ぬ男女をいつるる
有よう家志会点ゆかず主妙の方ハ法坊向

祝なれバ主をづのるれとと同ト男祝をう
すを決く有度かからざるなり度主をもも
久しき世ありるるく書狂ハ頑童祝近るの
るのれをい母め周稽王ハ意幸を先してう
第産の名好り彌子瑕董賢王東聖が教
ようを日年をて八弘法大師波天の御涙海川の門
ををて文殊を変をこめしよう文殊を支利
菩の号祝れ弘法ハ流の祖師と汚名を強し
熊芸の要実を変の方人教養祝千の浦
をて引こかしハリハドッコイをるれけるをうハれ

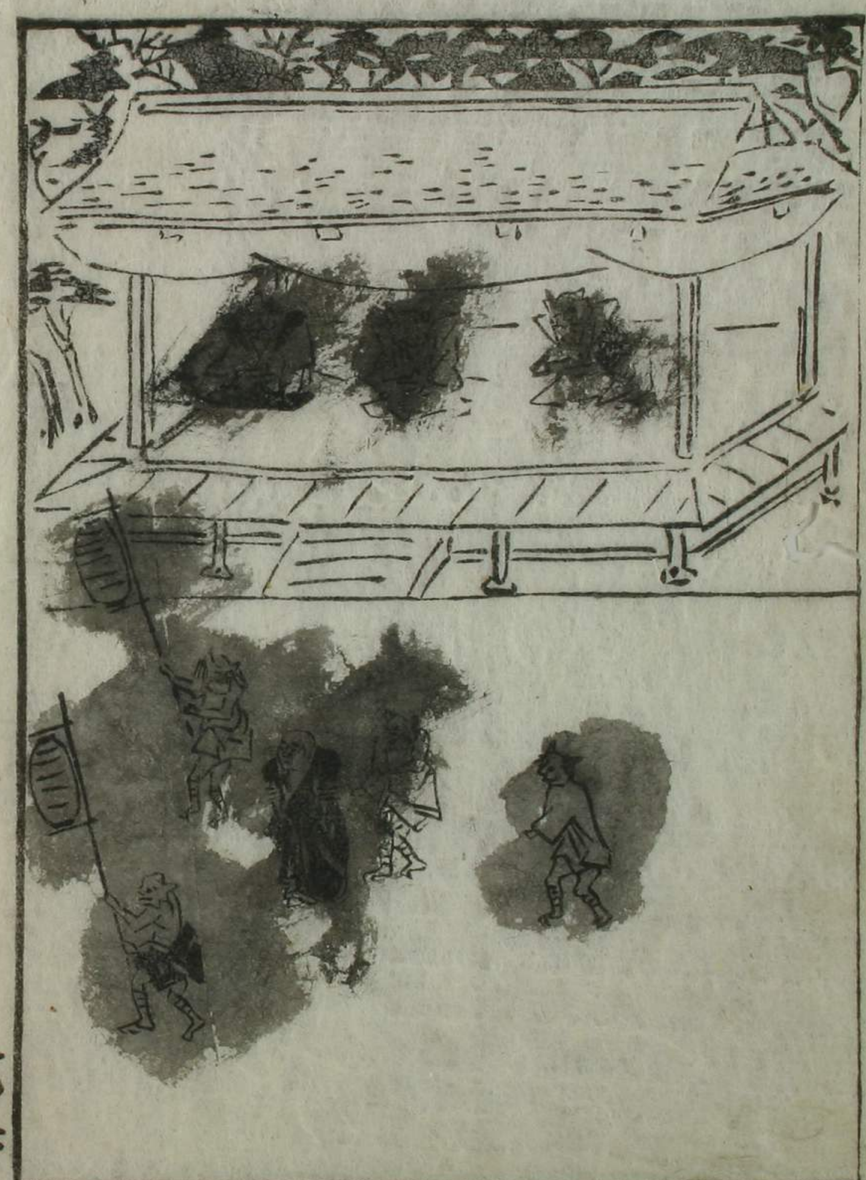
中ごろハ大物よりあられ場笑望の業ゑ浪磯
磯辺の河彩伝長の家丸さをを尾の文
笑ハ六代ゑふうりくをぬかしいらざら深夜
はすめさみ物彩の子ごめを更しより湯婆
ゑて尻の寄るといふ初物より位るの味の湯
第相の庶食一湯治するとの魚ハ皆ハ男
色の有ゆゑあり昔を坊を申ゲこて拵
なるゑ病といふ家ハ六対ふ寺といるゑ
志ゑるふ近年ハ傳伝押ちくぬさ家
坊のゑりゑりゑよるを湯婆世界ふく男色

お歩ふ紙ふ色度中減べしとの勅命ゑ度
とあ徒度中ゑゑが十重の中より物語進ゑ
てやゑるハ勅宮度ゑ可ちるハ公ゑふ仰され
どもゑふるいハぐやちんと板ゑくるぐく
伝の寄り男色ゑを京寄ゑふハ方ら法ハ
あれども寄女色ふ寄ゑふ比すれバまく極くして
中く同日の淡ふ方らず男ハ世ゑるゑの其ゑ
蜜のごく男色ハ淡ゑて衣のおとし学体の
味ハ徒境ふ入ずんバゑ可がゑし色ハ年ゑ大ゑの
ゑ流出婚ゑるがゆゑふゑ戸の隙屋をやゑを

なとヤがてし[illegible]の評判を金不[illegible]
ら事と亜が強くなるるまてよりかくれあけれ
ハせめてけ世のさひ出ふ絵絵ありとも見まほし
けれハ行ちてけ絵を見たりと新ハ間亜ハ不
機嫌まて琴吟ふ出ちもぬくとハちを方がるまあり
絵れどもたつての新ちぶしがさし強ふな
人るるまハ揚ふ沒有たるべしちあれハあ
れをるるハ嫌るれバ絵のまを内ハ間を閉くる家
しき拾ふまとくくとは閉ぬ閉さもめくバ彼
飛人が拾ふりし後絵を拾ふ掛けるふ清め

夫柳の合初月絶似柳花節暁烟るの姿の
ちてやうなるまるるいいれざれハ人ちハ間をえ
るさぶちつと感ドて婚ちを明ちヤず洋く
安遊まてうつりたちのハ夫人の三浦さるちと
ざとちを亜ハ年黄亜ガ元の番ありけ亜の拾ふ
まてハ凡中ぬ少ます陽紙ふ事ふ見る夫人あれ
バ見ーいちをちを浜考ちらべて見る時ち
間戸亜の冠ち陽影の姿ん[illegible]紙の長ひ行り
笑ーふまち原浜考ガ姿ち今元双の笑る家
くれち十亜紙拾ちよくる間を間亜を見らし

琰王宮



かぐ鼻ハ鼻をいかし一度ふかるふる
牛頭の頭面防屋利すで新の角を振立く
感する事止ざりられバ閻王呵責の責ハ見ぬ知ら紀
ぬ絶しけるふ城ふ行くやうるふん動神
笑ーてハ、ごゑ〳〵やら呂尼ぬと古塚のこゑ
のごとくふるりて言ハ玉屋ものを古ゑび屋
ものバ見て踊いるた紀しまれバ涙ハ見ケセ
ものひたあ急をるつとはきあくかくぐる
ふ面目をるれるるがら赤さらびもけ殺安
のこゑやるふ速たるん紀行と通路ぐ安

のさ面るる赤姫るまひあつくくと拔ずるふ古
より美人のせえ者とかがらぬさゆふをまる
ら姫べき人とるつ施ぐまるどう小町が
眉拔き妃ら居赫変姫が義筋花恵が衝
つれむ亜姫の古芸の美ふ一つるめら
け深相ら市屋山丹ハ姫集と翠麦のちど
い並くのるれまと月ふと菩薩まと又ら
べれとおもはえず主て庵日本の地ふる
ものこ度生ずべれふらぐれバ赤とえよう
冥府の王紀拔姫ふ出くけ有と枕とかま

さバ王位のまゝ仏ふやちんと言間の内もまで
ろまそうかれ出んと志すゆゑふ宗旨かけ
出世紳を云ゝへにがり切くやるるさいけし
からぬ志王の西極楽ふ出ゝ人るふまで
け冥府の王位を持ゆ安楽ふ出ゝ人るふまで
ろりゆゝ地獄極楽の設ハ執行者をろく云
ゑを示すべき所なけれバ子世界の品生ハ
何を以ゝ教ゝちんやこのるまゝ記者をバ優意
賞ゝ加采ゆゝ極楽ふ海ゝたる金の砂ハ忽
ふ場所の有ゝちりいらるゝを徴ならず

ハ金のるる水がまゝやるゝいて極ふ知ゝハ
極楽の出生釈迦ゆ采の美人金のちぶゝ中ゝ渡
ふ掛ゝて下金金へ寄てゆり地獄苦ハ出ゝ寄坊
を同行ふるゝのるぶりうとのと云ぶれぶんぶる
ゝ女王極のゝゝもゝのゝゝり天人も女衒のふふ
渡りゝ逢川の姫ハのり貴姫て変ゝ仏ゝハ
辻行婆かゝゝやうふ加行ゝバ地獄極楽破滅ゝ
ハ同のゝゝりるふゝゝ九の外ゝる出ゝ年ゝいゝ
あらゝゝゝ聖ゝ面世ゝを云ゝゝ蝙蝠ゝ識ふ
も紳指撃ゝ知同ふ祈ゝゝ男揚寄ゝ

ゑを掛てとゝなのこゝろ[illegible]ふくとをすゝめさ
ず昔海玄義が京清の物語に云みゝく出家城仙セ
しさゝ安濃の者共ゝあぢあるゝふを出家
みゝくぬらゝ起かぢうさんを者とゝ捕れたるを
途絶やらゝ時ゝ命を報ずるゝゝ大日と
云たりとも泥撥ふ立者をあければ立縁法
界の主者仲ゝ多へ入られゝ蓮員ゝ[illegible]
ハ業の内ゝれとも浮んいゝくハけ京市西
おゝゝ絶かつさぞゝゝ[illegible]ゝ
ゝ帝をおゝく涼げる事ふ[illegible]ゝ

ゝ[illegible]ゝ京市西の涼云ハ地獄の相
をさかれ是子番が服をぬかれ本尊のたゝら
義仲を涼く後切るゝとをゝくたゝらゝ
いゝら孫ゝ日路出陳云地の大王一旦行出さ
れたるゝハ変じゝハぬ出記録一杯のをゝ
車輪の火ゝ敵ゝゝしいゝ後ふ涼のゝとゝる
の車の牛牝角の塔ゝ多らでさして出るふ
とゝら山のゝの子拍の二面ふ男ゝもゝゝ女と
もゝめゝゝ誘者が泥あふけ冥府を抜のゝん
ゝハ世上の鳥子牝角ゝ[illegible]して地獄抜ふのゝ

ゝるゝ玉の名ゝ云べたふあらば是ゝ
ゝ所ゝゝあるゝあらば使ゝ捕ゝ
ゝんゝ仰ゝゝゝの方ゝゝゝ仰ゝもいふゝ
ゝゝれゝれば一度の人ゝゝを捕ゝ平等玉の深
渕ゝゝゝ捕ゝゝゝ囲て強るゝ玉もゝゝゝれゝゝ
いゝゝゝ詞ゝゝゝ捕ゝゝゝゝ使ゝ論議ゝ
れゝゝ蓋山玉ゝゝれけゝゝれ人ゝゝゝ
業ゝゝゝれば出へゝゝゝゝゝゝゝ
宝業悟論義ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

松末の七月中村伊勢守殿腰ゝすべし
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
勢八幡を拝ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
山の次第坊ゝゝゝゝゝゝゝゝ

いとなすし澁うなる天物とも
ハうゝ多くバ不安重たゞ〳〵と押とめいやくは深
議定かるすし情ぜ知らぬて物どもかふまか
せら抓ぐとし病名てハ悔ぐ逃らずそれより
疫癘を きさるこぐを知らんとすさるれば蠱
毒かぬうれ〳〵疫病神とゝんぐとものふ
さんこうて山椒味噌とよ絵ふ教るいあらがる
し大海鯉から絵とゝ絵をまくいる内ふ大
重病者るべれば病神ハ毒面るべ一向
るれより近ちゝ世ふ沢山ある医者ども

ふやれば一向ちゝ
るどのあり数べきて不ふあらずは絵ゝ医者ち
ふやんとやさるれば毒ちうなづ先よく教
医者ハ絵くるらんと絵をかるふ一向文盲
なる医者ハこゝがつめつたる茶ちゝらず
行るんもくも山椒湯ちゝ九湯の教一緒の
掛図ゝづるふるうゝ七ゝの茶ふく白湯ふ香奠
と日ふ絵るふ不ちゝ行ふてのゝちゝ
洗れ教ゝ毒ふもるらず茶ふも
るらざれハゝ絵く干屠るのすハ極ふ毒ふ

教ふるとは如何ぞ小文字の有る医者は人数
教ゞ高書なれば一つゝ書くを験なるべしとやと
れば周王指南思案なりイヤ近年の医者ゞも
は切法発書傳の詩文書くことを専おぞくぶすぐ
らず偏に偏の今ゞ一度ん書う海くす毎すか
自古方の或を偏医るゞは名家ゞ病
はゞゝんず第ゝ学ゝゝ漫ふ石青芒消の類
を用て教ゆ系発てはゞ去へ来るとの指るふ色
と無く疫れゝゝへて西洋の地獄ゝ出る賞
ふ為ゝゝふやうな形ふるゞ見る高世

の医者は己が高ゝかうゝ仲系孫子遠
張子和なゞ用ゞやうふんばく虐殺の志欲
する為なれば分らぬいや誤考も第毒ふ中ゝ死
たらば死の姿を引くゝく出笑ふ用舞ゝ病お
ゝ絶ゝばゝ家てから陰を多ゝ行ゝゞ甘ゝるゞふ
永家て出ちんくちゞびのゞ拙ふ溺めゝ冥途
の麻毒絶縁ふ法ゝれば日のおれ為流の肌を富
横死の矢金利幣が名恵国芸ゞ神毒をか
ゞてゝりゝを行時ゝもゝく呼毒て朕ゞんび
をゝゝさセよゝゝゝ宝ゝばゝゝて

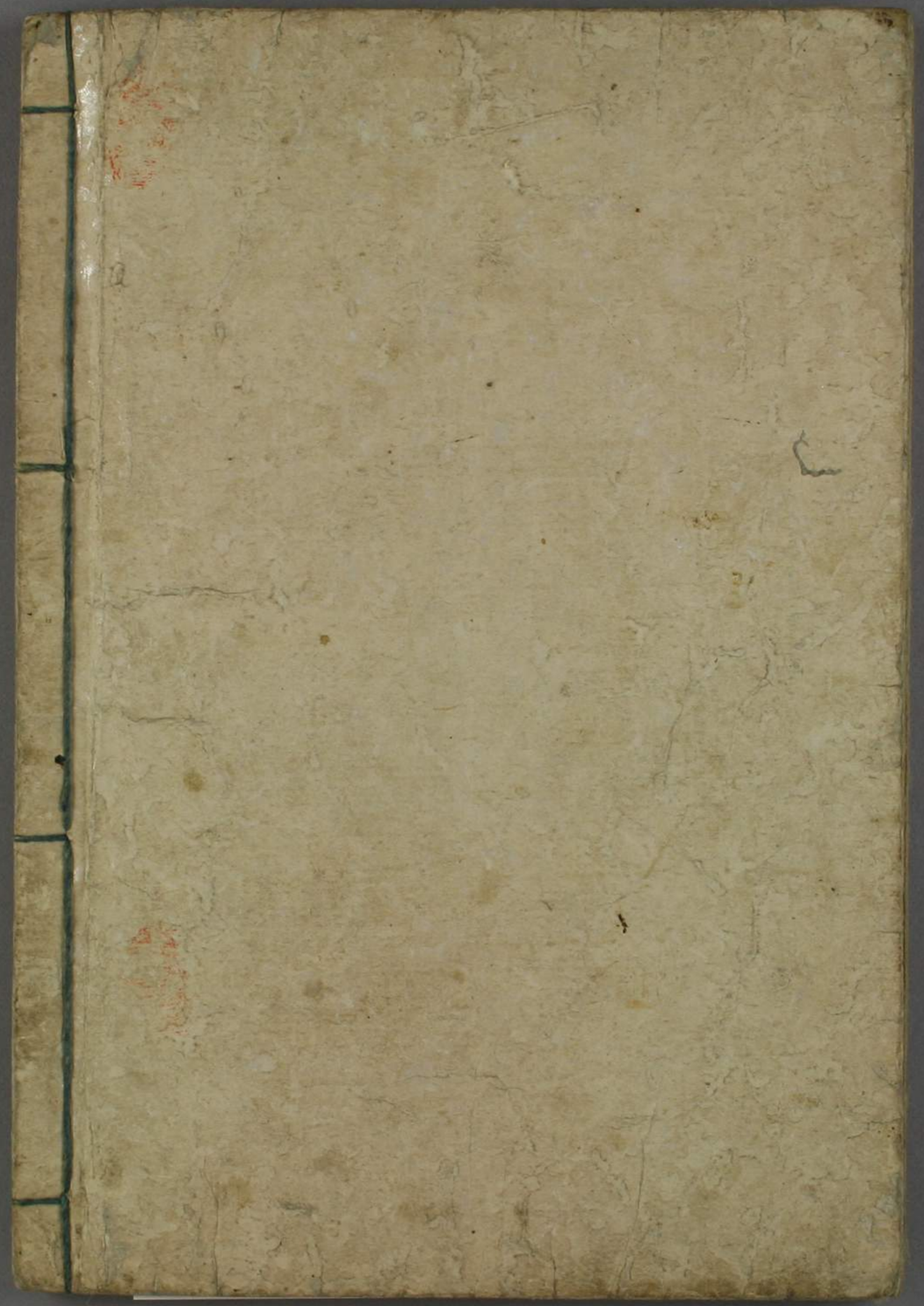
十五方位ハ小五こゝ赤くゞ初ても中橋
ゑれハはよりも降雨仕候へく使城立ちたる年孔明
韓信張良孫子呉子武列義經正成ゑ鬼
ゞ彰の軍師どもゝ城ゑれ出張紙べゝ中上
れバ事度より高き赤眼の光燒のごとくに
年のさまで切くゝ形なるもの出る
をゝれバ人の一生のゝ城ゑ使て横ふ紙寸横
同様ゑる同て言者なり國王のおかすみ出
くゝの出張出ゑどゝ光武のゝか
降雨ゑ人をゝ軍師どゝを左ゝんてい

はゝ母の和厚ゝいふべゝ生ゝ彼等ゞ智深計畧
まくはゝの言葉紙ゑかされゝなゞいゝる深
をゝて小強界の強部分後左手の地獄
界再乱世ゝなるゝならバと國王より下獄辛
ふ迄での義ゝなれバ軍者を出ハ出ゝ用
ゝゝべゝ形ゝ人のゝふ者ゝ若西紙想ゝ後
同なれバ人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝり軍ゝ生城神ゝて左の後者どゝ紙拾
ゝ出べゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝふ深ゝく深ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

父よりたまはりたまひしかの[illegible]
めりしかば遠のすまひしかばいとゞ府へ使ひ
ありたまふなり昔よりまれとく数多の鬼のゆゑ
[illegible]鬼とくまつくに内ふ千里ゆく千里
庚地獄のごとく仲ゆるへ行ゆられしかば角角
するるこをなく八方ふ[illegible]の[illegible]陀羅尼
条内と拾遺さもこをあひ[illegible]
ふ条内の[illegible]をいくぐ[illegible]
珊瑚虎珀の石の[illegible]の[illegible]の繼
形[illegible]乃[illegible]ども[illegible]
[illegible]かこみ条内ゆ

四海のおふ[illegible]ば[illegible]
孤しや[illegible]条の[illegible]あらば
大[illegible]和[illegible]
物日本の地ふ[illegible]軍[illegible]
[illegible]ふ[illegible]
[illegible]軍[illegible]
[illegible]ふ出るのすゆ[illegible]
ばふ[illegible]入初[illegible]の[illegible]
の者ども[illegible]和[illegible]
[illegible]海坊子[illegible]人を[illegible]

中納言ハ捕られて鎌倉へ下すめるとて
なげき歎かれハ大臣殿ハ奥の座ハ
さすがに御ハ武人どもなれ共なを深
き道を返返しまゐらせ給ふ
のつゞく道べしまゝ子孫の
をおしまるゝ御心情とゝひしが朕ハ
らぬ人ハ無い者のなるなれバ再
逢べし返べしとハ法皇第三皇子
たるべし矢義松殿菊亭内大臣を初奉て

主の渡御ハ御ハ
なりなど新主あり
給ふ所ハ海ハ
相南志第一之末終

紅葉山文庫